大信の發動

——本質宗學に於ける主体性の軌範——

室住一妙

一、生きてゐる

「現に生きてゐる」—それは只今の此の私である。……そして或は、之をよんでゐる—さらによみつゞけようとしてゐる讀者でもあらう。(現刹那に、こゝに關聯してゐる限りに於て)即ち之を書くもの、讀むもの、お互に現に生きてゐるに相違ないのである。その生き方は、ともかくとして、苦樂貧富、愛憎憂愁、順逆の境遇、或は團欒のうちにか孤獨の底にか、或は半睡半醉的にか、或は喪身失命的にか、とにもかくにも、この大地の上に生きてゐるのである。

生きてゐるといふ事實、眞實こそ、一切の初めであり、終りともなる。信はこの生の地に芽ばえる。大信はこの大地の底ふかくに根ざすのだ。確信とは、健全な芽であり、その生長である。絶大なる榮光を約束づけられてゐる生命である。即ち生の信であり、信そのものゝ生である。絶對の信は、絶對の生に本く。絶對無限永遠の生命といふのもその信の生長に外ならぬ。信と生とは全く一なのだ。生の全体そのものゝ中核から發芽してくる自覺的なもの、それが信と名けられ。その外的な生成過程を通俗に生といはれると見てもよいであらう。生と信とは、一体の兩面とか表裏とかといはれるよりも、寧ろ中核とその組成体とでもいへよう。一は求心的な方向をとつて、心的な自覺的に純一

にはたらいていく。一は物的に時間的空間的に擴大相續の遠心的方向をとる。

扨て、序でに一寸觸れてをき度いのは、かやうな關係を以て、佛教學の所謂眞俗二諦は妥當するものと考へられることである。從來最も抽象的觀念で、簡單にして、一寸捕足し難い二諦觀も、何等歪曲苦釋を要せずして、直ちにその本質が把握できるのではないとか思ふ。即ち信と生の關聯である。

新しい佛教學が、その根據を新鮮潑剌とした沃地に構へて、開拓し、生長せんとするならば、宜しく、その二諦觀を「生と信との關聯」を自覺しなくてはなるまいと思ふ。それは、そのまゝ、現實生活の部面をあくまでも包籠し消化し他方、科學哲學等の文化學的連關を確めると同時に、佛陀の永遠不滅の精神的生命に跪く機緣をつくりなしていくであらうから。これらは且く之を措き、生が初めであり、終であり、一切であるといふ言ひ方、根據そのものが、實は信がはたらいた爲めなのだ。生をば生たらしめるものが信である。生を全体、向上發展せしむる所の信と、その信を發生せしむる依地としての生と、これこそ私は確かに……認め、之を信じてゐる。この認識と確信自覺こそ、たとへ今、こゝに、このまゝ、私が筆を投じて息絶えようとも、この事實、眞實は……或は誤は誤ながら、迷妄は迷妄ながら、夢は夢ながらに……悠久の時そのものが證明するであらう。全宇宙が必ず實證すべきであらう。(と私もさう內心祈る。)否、特に祈らぬとも、そうあるべき當然必然たることを確信してゐる。宗教的に神佛の照覽にまかすといふ。哲學的に眞理そのものゝ自證とでもいへよう。

かういふ偉大な生、不思議な生を、よく生かし、よく觀、無限に創造的進展の空に飛躍すること、それより外に宗教も哲學も文化も個人も國家も戰爭も現實も理想も、歷史も、將來もあり得ぬ筈である。

然し、「その生はそも〳〵誰のものか?」といふ命題は、分りきつたものといへよう。或は奇異に響くか乃至は難解

な問題ともならう。私は生きてゐる、その生きてゐる私は、たしかに眞に私のものであらうか。即ち生の主体性の問題である。こゝに佛教學の所謂「我」の問題として中核が横つてゐる。また釋尊發心求道の契機であつた。私は今之について、檢討することを且くをいて、ごく現時の常識的通念によつて一往の解決をつけてをきたい。

私の生は、今現にある程度許されてゐる範圍に於ては、たしかに私の生といへる。といふと「私のものであつて、私のものでない。」まことに自語撞著した言ひ方だが、實際よく考へて見ると、

現にお互の生（生活、生命等）は、私といふ主体にまかされてゐるのかどうか？國家社會的にすでに制約せられてゐる。それは最近、際立つて痛感されるやうだが、實は人類發生以來さうだつたやうではないか。そして單に日本だけではなく世界中どこでもさうである。さらに國家社會的よりもつと根底に、大自然界より致命的制約を受けてゐることも否まれない。文化の進展によつて、可成の程度、制約を寛やかに保證されるに至りつゝあるとはいへ、之は永遠に、生（ナマの身）としては、脱却し切ることは難しいであらう。のみならず文化の進展に伴うて、自然界とは別に、社會國家的の制的、今のいはゆる統制の下に服さねば、一日といへども生活できなくなつて來た。殊に臨戰態勢下の今日は尚更である。理想鄕が實現するまでは幾百年幾千年、かゝる統制は、相當に（消長はあるにしても）加つて來るものと思はねばならぬ。そういふ意味で、過去は勿論現在將來ともに、お互に唯一の生命と思うてゐる、生も實は個人的私のものとは考へられないのだ。アナーキストの主張する全く無統制、無制約的な自由が許されるやうな世界や社會は、この現實人間界には、どうしても、たゞ一種のユートピヤに終るであらう。

然し、かうした外的制約はともかくとして、私の生が現在私のものとしても、私のといふ私は一体、生れようと意志し、自覺あつて生れて來たものだらうか。或はその壽命も、私が持つて、自由になし得るのだらうか？……否。然

らば、私の生とはいへ、その生れ始めにすでに私のではなかつたやうではないか。そして父母に社會に國家に育くまれ、敎養されて來たことはたしかであるが、この先き、いかなる不慮の自然界の災禍に或は自分の体内の異常變態に或は社會國家の必要に應召せしめられ、いかなる最期を告げるかは、誰人といへども保證し得ぬ所である。私は、私の生というてゐるものが、かやうな自然界、國家社會等の環境のもたらした生であり、それらに致命的な制約の綱を握られてゐる生であることが分つた。が然し、全く私以外のものの生でもない。やはり私の意識の自覺領域にをかれ私の意志感情の責任に委された生であることもたしかである。それは、ある程度である。その條件つきの程度の制約は、この身近かな社會國家の現實であり、歷史である。實は私の個といふものが獨立してはゐないのだ。悠久三千年來、光輝ある皇國の歷史の生ける一分子として、生みなされただけだ。此の自覺を、敢ふことのできない嚴たる存在である。そして、同時に私ならぬこの生は、支へられ、護られ、育成されつゝある現實の國家社會の一員。宏大の皇恩に浴してゐるものといふ感激を、抑へることもできない一分子なのだ。生々しい、この生の自覺は、そのまゝ、榮光ある皇民てふ自覺に透徹し來るところが、とりも直さず、異國には見られない國体の根强さ、麗はしさといへるのであらう。然し之とても實際のところ、我國に於ても、百年二百年昔の我々の祖先には、この自覺はなか〳〵に困難な雲の上の議論であつた。或はともすれば危險思想でさへあつた。

みたみわれ生けるしるしあり天地のさかゆる御代にあへらく思へば

ひしと心琴に共鳴する所以は、全く生の体驗より迸り出でた詠歎であり、自覺であり、歡喜であるからだ。されば、現に体驗しつゝある生の意識は、直ちに發して萬朶の櫻ともなり、又一朝、凝つては百錬の鐵ともなつて、確信自覺行動とはたらいて往くのである。

二、さゝげる命

我國に於て、すべてのもの、草木、國土、山河、動物、人間等、悉く個人の私有物ではない。上御一人の御ものである。蒼生のゆるぎも、民草のさゝやきも、塵も殘さず、御一人の大御寶なのである。從つて、こゝに、私の生とか自分のものとかいふ觀念も、言葉も、本來許されない筈である。然し、中世の支那思想、近代より現代の西歐思想の影響からして、公私とか、民權とか、統治支配とか、自由平等とか、個人、社會とかいふ觀念の分裂對立を金科玉條視して、永い間お互に怪まず、便宜にまぎれて得々と用ひ來り、現に流行してゐるのである。

さきほど檢討したやうに、私のとか自分のといふ意識、考へ方そのものが、實は迷妄なのではないか。殊に我國に於いては、個人的な私や自分をふりまはすのが、生意氣な不逞な思想ではなからうか。個別的な「自の分」といふものは許されない筈だ。自分といふ字義を深く考へ直して、我國獨自の解釋を發見しなくてはならぬ。自とは個々の自己ではなくて、御一人の自である。唯一絕對の自である。分はそのはたらき、その內容の一分子といふ意味に到達する。之を迂濶に、個々對立した自、自の分け前、分域だと執する所に、國体に對する元品の無明があるのではないかこゝから個人主義自由主義世界主義等が蘊釀し來るのではあるまいか。

現在叫ばれてゐる公益優先といふも、公私對立を立て前としての稱呼である。現在のところ、やむを得ないから、私より公を先とせよといふ命令のやうである。又民間にも、今はまあ仕方ない、御無理御もつとも、その內にはいゝ事もあらうと、我慢して過してゐるのである。滅私奉公も同樣、本來滅すべき私のあり得ない筈の我が國とせば、まこと蛇足の美辭ともきこえて來よう。之とて現實には過渡期だから、やむを得ないとする。その他私經濟私生活等々

も同様。さかんに流行を極めてゐる、報國といふ語も本來からすれば報酬的對立などあるべき筋合もないのだ。全一体の當然すぎる當然に盡すつとめ、神聖なるいとなみであつて、一死奉公、否七生滅賊こそ、臣子兆民、不滅の念願であらねばならぬ。

從て「さゝげる命」など、一体どこにあらうか。あらためて、御一人に誰がさゝげるのか。何をさゝげるのか。さゝげるといふ命は、本來、御一人の御ものであつたのではないか。さゝげるといふその當人の身心命根悉く、私ならぬ、本よりの大御寶なのではなかつたか、すでに然らば、求むべき者も物もなく、報ゆるといふ物も、人もあり得ない。

たゞ　畏くも、御自の分々を、生々世々、天壤無窮の祈願と盡瘁とがあるのみである。

かくてこそ、眞に、衷心より

「みたみわれ」を叫び得るのだ。

「生けるしるしあり」と自覺できるのだ。進んで、

「天地の榮ゆる御代に」「あへらく思へば」となる。否さらに將來すべく戰ふのである。祈願し盡瘁するのである。現在の「御代にあへらく思へば」の悅に止まらぬ。更に〳〵無窮の皇運を彌榮えしめ奉る天業を歡喜力行するのである。

みたみわれ生けるしるしあり大御代を彌榮えよといそしむ身はも

とうたひ上げたいのである。

三、宗教人として

こゝに、問題となるのは、宗教上のことである。といふのは「生きる」といふことの本質は、實は第一節にふれたやうに、肉体の生存には止らぬ。より本質的な問題として、精神の生活即ちその生長發展自覺が開展し來るのだ。之は單に天才者の發明でもない。あつてよく、なくてもすむといふ所謂文化財ではないのである。人間が眞に生きるには、永遠に生きるには、前節の「生けるしるし」有らしめるには「大御代の樂え」を彌が上にも將來し奉るには、何うしても欣求せずにはゐられぬ。それが宗教の本質なのであり、絶對の大信なのである。

既成諸宗教は、この欣求の心の諸の性格、諸の程度に應じた信仰、儀式、教儀を備へてゐるのである。その諸の宗教は、人間の切實な要求（欣求の心）即ち人間以上の何ものかに眞劍に憑らうとする。憑らうとせずにはゐられぬ、そういう對象を立てる。そして人間性、民族性等の性格、文化程度に應じて種々の形態をとる。具象的事物に托してゐるものが、多くの原始宗教であらうし、進んで觀念的理想を立てたり、或はそれら統一具現せる人格に對するもの、或は豫言者を通じて觀念的實在神を對象とするもの、等多々あらうが、人間の態度からすれば、絶對憑依の感情と宗教を定義づけられてゐるのは、まことに切實な氣持をよく表明してゐるのである。

換言すれば、宗教はいかなる觀念的乃至實在的神の對象をとるにしても、宗教的主体の方は、必ず絶對憑依の感情或は意志、進んで献身的行爲をとる。絶對の信仰歸命、それも言葉だけのものではなく、その誠實なる實行を條件とするのである。實のともなはぬ言葉、それはすでに信の字義にもとる。況んや宗教的信仰ではない、ましてや、絶對歸命とはいへない。之を缺いた宗教と稱するものあらば、そはすでに宗教の名をかたる、もぐりの宗教營業者である。

宗教は上述の如く、やむにやまざる所の絶對の献身歸命の信仰信念であり生活行動である。

次いで直ちに問題となるのは、諸外國に於ても、殊に我國に於ても、果して宗教的の信仰が、絶對に許されるかどうか？といふことである。現在のところ、事實歐米諸國はキリスト教を國教的と認めながらも、政治と宗教を分離しその信教、權限にも相當の條件乃至制限を加へてゐるのである。その種々の點はともかく、本質問題の献身歸依についてみよう。我が國に於て、國民個々が、その身、その魂なるものが、私のものならば、當然どこへでも、自由貿易的に賣買も、献納も歸依もあり得ようが、私ならぬ身命心は、一体何の權限あつてか、それが許されよう。即ち國体明徴を徹底し來るとき、諸多の宗教的對象に對して、南無し歸命することを國民個々に許されまいと懸念せざるを得ぬ所以となる。

なるほど、帝國憲法が保證するといふ。

日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ゲズ及ビ帝國臣民タルノ義務ニ背カザル限リニ於テ信教ノ自由ヲ有ス（取意）

といふ御條文による。但し宗教獨自の立場に於ては、いかなる條件にしろ、條件つきの信仰といふものは、すでに矛盾してゐるとまではいへなくても、易々とうけ容れられるかどうか。もとよりこれは形式上のこと。實際上諸宗教に少くも文化國民の信じようとする宗教に、御條文に觸れるやうな點を標榜はしてはゐないから、その宗教の本質面即ち教義信條について、禁斷されることも殆んど無いのであらうが、宗教信仰のとかく陷ち入り易い熱狂性よりして往々右條文にふれる者が出る、それを國法上取締るべきことを、懇ろに示されたものと拜する。仍つてこれまで、いかなる宗教も殆んど自由に信教を許されて來たのである。之が又反面自由主義に毒された時代殊に危機時代に際會して民間に於て簇生した類似宗教ともすれば、姪祠邪教が横行した所以である。

但しこれらの類似宗教等にとつては、その勢力が民間に相當擴大し維持されてゐるだけに、信仰してゐる自身には自らの信仰に對する公正なる判斷ができ難いことがよくある。自ら無上絶對と確信してゐても、識者の批判からすれば、たしかに姪祠邪教と認定せざるを得ぬものも相當にあるのである。同時にまた、この識者そのもの〻頭腦判斷についてみても、なか〳〵の問題である。といふのは常識以下に對する裁判は易いだらうが、高等宗教の神秘性はさてをいても、その哲理性に對して、或は人間感情の微妙にして而も深刻な理解については殆んど危つかしいのである。所がこれらの識者よりも教養に於いても、その職分的地位に於いても非常に矛盾的な危殆にあるのが、爲政者である所が、實際には御條文の適用は爲政者の解釋判斷によつて裁かれるのであるから、此の點に關して、今のところやむを得ないとはいへ、實に皇國文教の靈府にとつての一大要件と考へざるを得ないのである。

さて上述の論旨を要約してみると、皇國民人としての本質問題、それを生と信、生活と宗教といふ問題に局限し、さらに國体理念と宗教本質との矛盾關係は、いかにして打開できようかといふ一大案件に結果したのである。

即ち信教自由の憲法條文をごく通俗的に解釋して、殆んどすべての信教自由を許した從來の方法である。之に前述の如き弊を見る上は、さらに解釋についても一層の愼重深刻味を加へねばならなくなつた。譬へてみれば從來の解釋では、諸多の宗教を、國民の趣味的な自由に考へられたかして、丁度親が幼い子供達の遊戯な玩具を許すときに、こんな意味を申し渡すであらう。「お前たち、元氣に何でもして遊ぶのはい〻が、他人樣の邪魔したり、迷惑になつたりしないやうに。言ひつけられたことはよく守り、召ばれたらすぐお出でなさい。」之をごく淺薄に考へるからして、信仰の自由放任自義となり、多大の餘弊を生じたのである。即ち兒童の教育上面白からぬ有樣も見えるし、またさう〳〵遊ばしてをいてもい〻ものでもないから、これから國民學校に入れて積極的に躾もし、遠大なる理想と自覺のもとに

周到なる教科課程を與へなくてはならぬ。自分はこの點からして、即ち國体理念の自覺と在來諸宗教の本質との關係について一の問題として提出した。そこでこの譬へ話のやうに、國民の師父たるもの、よく〳〵賢明に周到に熟慮施設しなくてはならぬことである。もつとも只今の臨戰態勢下の宗教々團の統制については、如上の必要からのみ來たのではなく、さし迫つた緊急な要件、一は防諜、一は戰線銃後の國民思想といふより、全体一丸とした皇民士氣の問題ともいふべき、である。それも爲政者の立場からしては、內容よりはまづ形式的に、從つて歷史的發展よりは、社會的制度の整備と活動とを、直ちに要求するのである。餘りにも性急な我儘な御命令とは思つても、殊勝に默々とやつてゐるやうだ。が然し、實はこんなことでは皇國の將來はどうなるであらう。

我々皇民として今日、直ちに戒慎すべき第一は、皇國に於ける諸多の宗教は、果してその絕對的存立を許されるか否か、之を今日以後の問題として、宗教家自身が反省し、究明するについても、自らの宗教信仰の本質をあくまで見失はず、公明正大に批判し、進退せねばならぬ。第二に宗教に關與する爲政者も亦、純眞に謙虛に如上の次第を熟慮せねばならぬ。形式的でなく本質的に、一時の間に合はせでなく、永遠の理想的生長を目圖すべきである。

四、宗徒として

人類史開闢以來の慘たる大戰が、こゝに起つてゐるのである。幸ひにかういふ言ひ方がよくも出來る位、我が國の今日は惠まれてゐるが、更に次の日といはず、今日よく備へねばならぬ。が物と心、といへば盡きようか。物心の總動員といへば終りであらうか。そう考へてゐるものが大部分であらう。そこにこそ問題があるのである。之を予は本誌の前號に「新体制下における本質宗學よりの提題」として論じたのであつたが悲しい哉、この點はたしか難信難解

である。よつて皇國の前途いよ〳〵危いと憂へるのである。單簡に直言せば、總動員される物心は、まづよしとして總動員するものは誰かといふ點、何を爲すかといふ點、如何になすかといふ點である。唯々諾々、一切を献げて（滅私奉公）悔いざる、否、眞の悦となすは、是れ本より忠である。然し、滅私奉公の本質について、公私の區別ではなく、公そのものゝ本質について、眞に自覺し、自任し、憂慮やまざる、營々と自彊不息の念願……その御魂こそ、吾が宗祖なのである。宗徒としての臣道實踐とは、この御魂を活かすことにある。自ら体現することのみにある。これを究むるを以て本質宗學に於ける主体性の檢討と題した所以で、たしかに主体性の檢討とは、リクツの問題ではなく道義といふより、活ける道念のはたらきに存する。

主体性とは活ける人格である。即ち宗祖が親しく「日蓮が弟子檀那」と仰せられたこの人間に外ならぬ。尊い名稱を冒し奉る教團人幾百萬あるだらうか。その一々の頭上に双肩に、荷はされ、浴びされてゐる課題、重責を痛感するではないか。

教團の合同、そはやつたのではなく、やらされたのである。それはよい。教義信條より本尊の儀式に至るまで、とかくの干渉を受けてゐる事實、これは否まれない。官憲のかうした統制の是非急要等はともかく、統制癖か神經病か左傾の策動か、それを假面とせる敵性第五列か、輕々に逆賭し難いものがある。キリスト教より神道、神道より佛教就中我が宗門こそ目の敵に睨ふことは果して正氣の沙汰であらうか。純眞の大醇、國体絶對の開顯者をとらへて逆賊よばはり、遺文の改訂削除、ひいては本尊に對する恣意なる評判と脅喝等々に至つては、之が非常時に處する憂國の志ある爲政者なのか、護國の正念があるのか。而も、宗徒の之に對處するや、无爲无策、无氣力にして、たゞ周章狼狽、東西を辨へどころか天地顚倒してとんでもない者に叩頭百拜。全く、天魔の操る旋風裡に翻轉、愚弄されてゐる

その醜態は見るべくもない。之が吾が宗祖の末流であるか、之が一体宗教家なのかと、目をみはらざるを得ないのである。

この宗團にとつては、同様重要危機に直面してゐる。而も左顧右眄も、寸秒の遲退の許されぬ切迫を告ぐ。されば たゞ追從か、抗議か、傍觀か或は等、速急にその態度を定めなくてはならぬ。速急と同時に正しくなくてはならぬ。正しいといふのは、いふまでもなく、宗祖の大精神に絶對歸命し合体し、そこから働き出すことである。宗徒としての態度はこれより以外にあるであらうか。

要するに、これまでの諸問題は、二諦としてまとめられよう。人間として、……生きてゐる……限りに於て、生と信との問題。次に生ける現實の人間である以上は國民である。吾等は光榮ある皇民である。皇民として、自ら又信と生との問題を解決せねばならない。皇國の宗教人としての立場である。その更にせりつめられたのが、佛教徒、日蓮宗徒として今茲に生々しい、むしろ悲慘なるこれらの課題をみつめる。

「日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず」とある。雄々しく邁進しよう。

そも〳〵現在の宗團を以て、宗祖を名儀上祀るからといつて、宗祖の御ものであり、御精神を体してゐる教團とはみなし得ない。むしろ、實にこの宗門の様態を通して教義を信じ、祖師を歸納し奉つて仰ぐこそ、主客顚倒なのではあるまいか。今のところ、この宗門はたしかに俗吏によつて裁かれ、むしろ大いに裁かれねばならぬ實情なのである指導とか、教化どころの騷ぎではないのである。これも重要な皮肉な痛烈なる矛盾である。何よりも證據に國体明徵の國家には、あの大忠大孝の大國望が逆賊視されて、一言之が辯護も許されぬ宗門と國家と時世とを見よ。嚴しく、經文には、末法之濁處世と豫言されてあるにはあるが、さても之が逆謗の重罪を認めるものも、嗔るものも、歎くも

のも、責めるものもない。滔々乎として衣食と名利とをめざし、權力に虐げられて、殘害の苦患にあえで、而も自ら覺らず知らざるの態である。稀に胸臆に憤悲やまざるも、この世紀の轉換の大濤のうち、片々とたどよひ、昏々と正念を失うた大衆に話してわかる時でもなく、問題でもない。もつと〳〵よほどの深謀遠慮の覺悟と用意とがなくては叶はぬ。即ち宗祖の御魂より發動するより外はない。

所が、こゝにあくまでも鷄と卵とのやうな循環論法はつゞく。この二元的對立は果していかに。宗團や教學が不當殘虐な處分を受けたる場合に、宗徒はいかに對處すべきか、なるほど人間として出來る限りのことをすべきに違ひないのである。が その態度が問題である。方針覺悟が重大な問題なのである。眞實は宗祖に聞くより外ないといへばそれまでだ。宗祖に聞くとは、宗祖に絶對歸命の謂である。これはむづかしいやうで、また至つて簡單である。また最も公正な妥當なまちがひのない方法である。まぬるいやうで一番手近な方法ではないかと信ずる。さり乍ら、皇民として宗教に絶對歸命は許されるかどうか。國体明徴の絶對理念として、南無するといふ觀念や行事や行動が許されるかどうか。といふ問題に直ちに矛盾衝突することとなる。

そこで、今しばらく退いて、この矛盾した大問題を、更めて檢討する。二律背反は概念上……恐らくあらゆる諸問題をつきつめていくとき必ず、出來るものであらう。まづ世界の有限と無限、根本惡と善、人間の心靈と肉体、生命に於ける生と死等より小さく見れば、われ〳〵人間の兩眼兩手兩耳兩足等々に至るまで、よくも矛盾對立葛籐も當然に必然に紛起せねばなるまいに、案外平和に否よく〳〵調和し扶け相うて實用を果しつゝあることではないか、してみると概念的な對立は概念のまゝでは何とも出來ないのが、實踐によつて、これは至極スムースに、却て生き〳〵と勇しく活躍ができること、無限の勝れた効果を顯はすものであることが實證されるのではないか。法と國、神佛と

人間、宗教と政治等の關係も同樣ではないかと思はれる。

卑近な譬だが、目を放つて海洋をみよ。萬波浩蕩の無際涯の彼方……そしてまた大陸を眺めよ。雲煙靄々たる千山萬嶽の姿を。見るかぎり望むかぎり、この陸と海はあくまでも對立してゐる。その分域を守り乍ら、時には爭ひながら、然し、水平面、地平線上におけるこの一は深く、一は高く、それ〴〵に背反しながらも、この山海は實は一つなのである。一續きなのである。海の底ふかく徹すれば、海も大洋も湖も沼も池も、山も川も大陸も島も一續きであり一大地塊なのであつた。水平面にこそ小波もあれば、山をも呑まんずる荒濤もあらう。地平線上からは、平野もあれば雲を凌ぐ高峯も千迅の谷底もある。この海陸一丸した地塊をば地球と名けられ、これを包牢しつゝ、天空は莞爾と澄みわたり、悠然と翻弄してゐるではないか。海の底に徹すとは實踐である。默々たる實行、綿々密々の行持である地球を包籠する虛空とは、不斷の精進、飛躍、無限の創造自覺ではあるまいか。

我らは皇民、この皇民の自覺あればこそ、祖師日蓮を仰ぐのである。その日蓮とはいかなるものぞ。

日蓮はやはり人間であつた。我がこの國土に生を受けた皇民である、自ら日蓮は東夷東條の民の子、氏姓もなき漁夫の子、賤しき旋陀羅が子と公言、その生々の血緣を堂々と名乘つてゐられる。幼にして父母の家を出で、學問に精進されたのは、生易しい理想や、志望ではなかつた。全く生死一大事の究明であつた。皇國の致命的な重大問題解決の爲めであつた。この世、この國土に誕れられた年、承久の大逆。國体の大異變。之が責任者として、鎭護國家の敎法に對する究明、責任の究追である。かくて二十年の螢雪錐穿の結果、覺悟されたるは何か。

千光山頂、清澄の雲をわけて、兩者對面絕叫誓約されたる事實こそ、末法萬年の闇を照らし、法界を敎導すべき開宗の嚴儀に外ならぬ。

皇國絶對の維新を目ざして、三諫四難、波瀾萬丈の生涯は全く、立正安國の運動に一貫せられたためである。即ち皇國の世界的使命、神聖な天業の展開に外ならぬ。その教法に對する絶對歸命こそ、皇國王臣一同の軌範であり、世界萬邦歸一、常寂光實現の大道なのである。祖師はすでに、一個半個の民人ではない。凡々たる圓頂黑衣の列を超えた、世界の精神界の三德具現者にまします。

水平面の底ふかく、極地に徹した、体驗實證の華は蓮華とひらいた。地平線上、無上の虛空に高く、永恒に自覺唱導の日輪と輝いた。一身、色心の矛盾は不惜身命の行事によつて、美事剋服され活かされたではないか。一國法國の病衰も、立正安國不退轉の願業となつた以上、必ずやこの大地に、恢復され、健全將來せねばやまぬ。

あゝ、この大忠大孝、無比の功勳よ。純忠至誠の誓願よ。

上御一人のまことの御精命を、いやが上にも開顯し奉るとともに、肇國の理念をいかんなく体現し、八百萬の神々の精魂の法爾と凝つた法格におはすのが、高祖大聖にましますのである。

この意味で、立正によつて眞の安國があり、日蓮によりて日本國の有無もある所以、宗祖に歸命するのみが眞の皇民たり得るのである。眞實、祖師の唱導された宗旨は、斷じてこれまでの佛教諸宗や、諸多の宗教の範圍内には類例を絶してゐる。よつてあの激烈な破折があつた。それをば、形骸を守つて衣食する末輩が、法身の御舍利の切賣所か法敵の土足下、蹂躙に委したのである。肝腦を土に垂らし、骨肉を刻んでもあきたらぬ重罪を一体どこに訴へればいゝのか。否々、切迫絶命のこの時、すでに對策ではない、處置ではない。五体を、一身を、躍らしてどこかへ、たゝきつけるのみである。

五、獨りの道

今年は七月、

明治大帝の卅年の御祥忌に際して、私かに法味を備へ奉り、ふかく時艱の拓開、皇運扶翼すべき赤子の一分を御祈念申したとき、感得し奉つた御製は左の如くである。

かりそめの事に心をうごかすな家の柱と立てらるゝ身は

全く謹んで拜承いたす如くである。我等はたしか、とるに足らぬ微塵の如き存在、無能非力の命であり、汚濁にまみれた心意ではあるにしても、この身心には、一分の私があつてはならぬ。そはすでに上御一人の赤子として不思議な因緣によりて生をこの土に受け、信をこの大法に結ばしめ、この大聖に歸命せしめ給ひし、大御心に感激し奉る。皇國の柱石に任じ給うて深く愛重護念まします叡慮のほどを痛く銘感し奉る次第である。かりそめの事に心を動かしてとかくの憤慨横議の餘地すら許されないのではないか。苟も、法國に神佛に、不思議の因緣あり、次第あり、また時には靈化の發現すべきあるは、もとよりの事であるからには、かうした凡慮を絶したる境界の消息をば、恣意に、生意氣にも、愚劣淺膚の臆斷を敢てするほど、罪深き害毒の沙汰はないのである。愼むべきはこの我執、この增上慢、この不信ではあるまいか。

祖師に絶對歸命し奉ることのみ、大御心に對へ奉り得る次第であり、本緣なのである。然らば、たとへいかなる官憲の暴壓が來ようとも、挺身、護惜建立すること、眞の大忠大孝の所以ではあるまいか。

現下のところ、國体明徵の徹底した理念こそ、我國一般の諸宗教徒をして、その正念を自覺せしめ得る權威である

と同時に、宗祖の立正安國の三大誓願は國体理念の究極の發揮なのだ。國体の國体たるの精命こそ、宗祖によつて發揮せられる。(それは本質宗學が究明する。)それを眞の宗祖の御弟子檀那が實現する。……これを大御心は求め給ふのである。

畏くも大御心は異境萬里の野に山に赤子の血を流し、骨肉をさらし朽たしめる現實を、いかばかり痛しく惱ましく御思召すことであらう。

或はまた、至尊の寶位におはして、なほ彌高き、無上菩提の道法を求め、昏々服庸の誓を發し給ひては晝夜に常に精進ましまします御行實のほど、誠に畏き極みである。

下化衆生は、時に上、天空にあつて日輪の如く、權威を振ひ、難化强剛を折伏し給ひ、上求菩提は、下、汚泥に出でて蓮花の如く順緣を攝受しましまし。これら不可思議神通の顯現であると同時に、体驗實證の活動なのである。

祖師の御名乘りに、この深玄の義分あり、そのまゝ、また全宗徒の現實に即刻、体驗實證すべき標語象徵であらねばならぬ。

從て、少くも我國内における諸宗教は悉く裁判し盡して、その存立を認めないのが、本領である。「天下萬民諸乘一佛乘となつて妙法獨り繁昌せん時」を期し待つべき願業あるに、之はまた國体正義の理念からしても諸多の宗教の自由は許し難いのに、憲法の御條文に寛容に遊ばされたるは、當分且らくの機緣の純熟を待ち給ひし、深き畏き大御心のほどを拜察し奉る。

これにつきては、諸の教徒は無論我々宗徒さへも、深く察せず小成偷安、正念を失ひ、東西ともに失し、天地顚倒し、宗家を擧げて妖焰に投げ込むに至つたのである。乃ち營利の集團あれども主義の宗團はない。全く、祖師に對す

る逆謗無幾の冒瀆は恐しくも憎むべき不倶戴天の仇敵として、奮起せねばならぬ。そは外に在るのではない。お互我々の内身にひそんでゐる。この内敵を誅滅して、祖師の生身法身の御舍利の御寶前に跪き、懺悔せねばならぬ。

あゝ、誰を憤らう、恨まう。この七百年の歴史、長い殉難の跡よ。此經難持の四字が眞紅の色ににぢんだり、泥土に塗れたり、斷ち切られたり、逆謗の荊で織りなされた不思議な歴史よ。それを繰うて生みなされた人の運命こそ、祖師の御名を蒙り、御教誡の一句に接したものゝ、目を開けて我と我を、おの〳〵見るべきである。

六、大信の發動

自分は前號の本誌に、「新体制下に於ける本質宗學よりの提題」として急迫世界情勢下の我が新体制とはいかなる歴史的必然があるか。宗教人殊に我々宗徒にとつての課題……特に積極的本務的な課題とは何か。之を本質宗學よりの提題として、いさゝか究明する所があつたが、爾來滿一ケ年、内外は愈々火急を告げてゐる。

前號の論文に結論する點は、所詮、宗祖の三大誓願を現實的に國家社會に運動化することである。之こそ新体制中の眞實の眞体制であるべきこと、之こそ宗徒のよつて以て國に報ゆべき立正安國の行動であり、翼賛体制であると論じその必須の要心は絶對歸命信に外ならぬことを痛論した。然し、それもたゞ、空疎な論議に過ぎなかつたと、何より事實が證明した。一ケ年の宗門の動きを見る。全く危急存亡どころが、顚倒し崩壞し去つたあとを見てゐるだけとはなつた。この荒凉たる跡に立つて、狼敗の避難民の逃げゆくすがたの餘りにも情なく、不甲斐なさ。さながら亡者の獄卒に追はれ〳〵て針の山にかけ登されてゐるやうだ。その墜ちゆ先くも見えすいてゐる。

今はすでにそうした論議の時ではない。然し、前論の論旨はこの事を決したのであるから、百尺竿頭一歩を進めて

理より事へ、客体の條理を主体の行實へ、最近一ケ年の諸問題をふくんで、致命的な要點に約して之が解決を求めて來たのである。

そこで現實に生きてゐるといふ立場から、國家と宗教、宗祖の人格と法格、神と佛と、一君萬民の國体理念等について究明すると同時に、我々はいかに躍進すべきかを決すべき段階に來たのである。

自分は生きてゐる。自分は尊嚴なる御自の一分として、天壤無窮の皇恩に育まれた赤子と有り難く自覺した。祖師の御教と行績によつて、皇國の宇宙的な輝く大使命を悟らしめて頂いた。こゝに心意泰然として絶對歸命し奉る。いかなる難關も突破できる確信を以て勇躍する。然し必ずしも易々坦々たる道ではないであらう。汗と血と涙と、骨を碎き肉を裂く奉仕でもあらう。口舌筆紙の談道ではなくして、默々たる行實のみにまかす。さらに退つ引きならぬ使命を負はされた。この國の實狀、この家の內情、深い憤悲、逆謗の罪業等、悉く之を認める。この責任を引受けねばならぬ。「一切衆生の異の苦を受くるは悉く日蓮一人の苦なるべし」と仰せられた宗祖に歸命する者にとつても、厭でも負はされる責任なのである。すべて責任の歸趣する所そは宗祖にある。從つて之が打開解決もそこから發す。善につけ惡につけ、法國の大事はこの大信の根元に於いて徹底的に照破し裁決される。議論ではない、責むべき對手もない。若しありとせば自のみだ。愼むべきは獨のみだ。佛祖に對し奉り、深刻の大懺悔、無限の大精進を誓ひ奉るのみである。大信の發動とは、眞實の大生命から發したのだ。大責任の自覺が根幹である。大懺悔はその枝葉である。大精進はその花である。

責任とは一宗の精命を承繼する心臟である。それは必ず、血管に連接する。即ち懺悔は靜脈に、精進は動脈に、血液で云へば、白赤の血液に。一は淨め、一ははたらく、生理的法爾の機能に似てゐる。

大信の發動は個人完成の意味ではなく、无限に擴大し向上していく有機組織体である。社會國家にはたらいて、健全なる生育を司り、更に高次の有機体を創造する。創造された有機体はさらに高度の自覺をもたらし、この自覺によつて深重の責任と懺悔と精進とがつゞき、かくして无限に自發自展して飛躍していくのである。

皇土に生れた幾億の民人、すでに個々の生を認めず、而も至尊の御自の一分たるの億兆である。億兆の身命心凝つて、妙法の純粹信となる。大信の發動は、無限創造、進展の造化を致す生命体となる。三大誓願がはたらき出す。活きてゐる「大日本」といふ偉大なる人格國家は、世界を道義的に統一して、所謂八紘一宇といはれるのである。その道義統一をば宗義上、一天四海皆歸妙法と稱せられてゐる。

我らはたゞ、默々と大信の發動に精進するのみである。

七、軌　範

然うだ。我らはたゞ默々精進のみ。正しき精進は、大信に發する。而して嚴たる軌範の存することはいふまでもない。僧風として、古來の三則、給仕、行法、學問が之である。弘經の三軌の衣座室（忍辱、慈悲、法空）或は三大誓願等それ〴〵同一の理諦に即して、實行の用面の爲に信條の稱呼を異にしただけであると思ふ。今且く便宜に圖示する

（弘經三軌）（宗祖大願）（同教訓）（同宗風）（今日信條）

忍辱衣……柱……信心　給仕　責任

如來　法空座……眼目……學道　學問　懺悔　歸命信

慈悲室……大船……行道　行法　精進

法華經法師品に、佛は末代に法花經を弘むる行者は必ず、如來の衣を着、如來の室に入り、如來の座に坐して法を說け、如來衣とは柔和忍辱、如來の室とは大慈悲心、如來座とは諸法空である。この三の信條は弘經者の必ず依るべき軌道である。次の宗祖の大願は開いて、日本の柱とは耐忍調和の德として一國一家の柱石に任じ、諸法空の智眼を開いては、無障碍に照徹なし、如來の大慈悲あふれて大船としつらひ運營し給ふ。之をば「行學二道乃至信心より起るべく」と念諭せられ、宗風の次第學則に給仕第一、行法第二、學問第三の次第を立てゝ、初心を誡められたのであるが、今日さし迫つた難局に處するには又特別な覺悟信條がなくてはならぬ。たとへば、信行學の中の信心一つについても、正格純粹な信心の血脈相承（法命相續）がその中心となり、これが斷絕や覆漏汚雜の謗法に對する懺悔が常に伴ひ、勇猛精進の行願にはげまされねばならぬやうに、行法についても、日常の生活、行爲、事業等にわたる責任とは護惜建立を願業、自他の謗法の罪を禁斷すべく懺悔し、不退轉に精進していかねばならぬやうに、學問に於いても同樣、その信心、行願の中樞を明め、究め確めるを以て責任とし、翻つて諸餘の宗教學術の非異を訂すを以て懺悔とし、進んで時代社會に適應せる信仰學術体系の組織教化を企畫するを以て精進と考へられる。責任と懺悔と精進の三は給仕の中にも自づと具し、學問行法の中にもそれ〴〵中樞と消極積極的兩面にはたらくべきものと考へねばならぬ。

即ち弘經の三軌は、如來使の資格、即ち正像末三時に齊しく則らねばならぬ、導師としての資格であるが、柱眼船の三願は、末法應時の宗教、大日本皇國の神聖なる天業の綱領であり、具体的組織体を形示せられたものである。即ち事業化した宗祖なのである。之が要素たる弟子檀那の根本信條を信行學となし、之が初心幼稚の教育過程として示すを給仕修行學問の三則となす。なほ、この三則の一々に自づと責任、懺悔、精進が開かれねばならぬ所以も明かで

絶對歸命信を以て一貫しつゝ、その活潑々地のはたらきを明確にせんが爲めである。これ自づから次の如く信の諸義を要約されて來てゐることも云ふまでもない。信心の決定とは、生命的な信は必ず決定不動の金剛の如き安住地に立つ。同時にそこに自づから特異な世界が展けて來る。それは必ずそうである。ある內心深きところ、眞正の至誠から發した情熱には特異の閃めき、光芒が放たれるのである。一寸の虫にも五分の魂、匹夫の志も奪ふべからざる所以のものはこゝに本くのである。況んや絶對絶命的の歸命信に於てをや。宗祖や釋尊や久遠本佛の生命的感應に於てをやそこに久遠の生命より流れ來る所の血脈があり、その無限の感激法悅に燃える決定信には崇高絶對な自覺がある。自覺はその現刹那に於ける現實の生き方を認める。同時に世界（環り支へる空間）觀と、歷史（運り來る時間）觀とを把握する。自然、必然、當然的になす責任を感ずる。而して過去に對する心からの反省、深刻の懺悔に灼き盡される位であらう。未來に對する勇躍に、精進に、大誓願を發すであらう。この自ら發した誓願に、自ら展く精進等も、その本くところは、現在及過去の自己及一切のものに即しての深刻な懺悔である。怖畏、慚愧、堪えられない苦痛であり、苦悶である。こうした重油のやうな罪惡感……懺悔の念に驅られて身も世もあらぬ献身歸命、勇往邁進の出發燃燒となる。進んで、より高次な創造となり、勝義の昇華となり、絶大な自覺となる。信は一段と飛躍する。

以上、個的の自に於ける高次の信の進展は、同時に空間的に信地の擴大である。佛土の淨化である。又そのまゝ時間的に法命の相續である。血脈の流通である。御經にはこの消息を述べられて、本門得益の中、五十展轉隨喜の功德と讃へられてゐる。大信の發動はこれより外にはあり得ない。布敎も傳導も、或は寺門經營も、生々世々の願業も國家も文化も人類の歷史そのものすら、この大信の發動、進展より外に意義ありとするならば、それはいはゆる魔業に過ぎないのである。「善につけ、惡につけ、法花經をすつるは、地獄の業なるべし。」とは千萬世に貫通して、ひときわ

たつてゐる金言である。天の御聲なのである。

從來は、信とは無疑、隨順、歸命、感應、決定、清淨等と名目はいくらも擧げられるが、詮とする所は、信は歸命である。歸命とは、個的の生命の全的のものへの轉換である。甦ること、回心とも、第二の誕生とも、新生ともいはれる所以である。そこに新鮮な目、耳、手、足と大地があり、青空がある。之を自覺といふ。そして自分の体内にたぎりたつ、鮮やかな若々しい清い自任の感。又、これまでの生と死に對し、物と心に對して底しれぬ懺悔が湧く。怪しくも矛盾した點に自覺の火が點じ、雄々しい誓願となり、精進となり、隨順感應のはたらきとなつて生きる。死ぬる。無限に生々死々して、宗祖の大慈願海に朝宗していくことができよう。

八、微かな歩み

生きてゐる。生きてゐる眞實の神嚴さに打たれる。それは衣食の奴とはならぬ。生きてゐる肉体に、寄生した精神の自惚や我慢ではない。皇民の自覺も、偏狹な島國根性のそれではない。八紘を曠うし、地軸を拆いてもなほ安住し得る妙法の信地に生きるからである。國際危局刻々の切迫、机上にきざむ時計のセコンドとともに、世界は今、うめき、あえぎ、轉々ころがりつゝある賽の目で、然もどう變るわけでもなく、免れようもない。危局は直面、大きな歩みで濶歩して來る。

尊嚴な生と不思議な信と。炎々焰のなかに托した微生を、悅んで献げようと思ふ。かなしくもあはれな生ながら、こゝに假に私と呼ばせて貰ふ。私は宗祖日蓮大聖人を信ずる。信ずるといひ切れないやうな私を慚ぢ愧づる。顯にも冥にも怖れ畏れる者である。而もその上、私をめぐる環境のいかに、宗祖の御心にそぐはぬ根本的に許すべからざる

ことの多いことか。またこれまでの歴史、因習等にいかに悲むべく、哀むべく、憎むべき事どもの充ち満ちてゐることか。現に重積してゐる難問題、裁き得ずに、その重壓の下に、明日の日を空だのみしてゐる。さながら佛様の御物語りがある。猛獸に追はれ〳〵て井の中に墜ちた。そして危くも、すがつた藤蔓を、さらにまた、白黑の鼠にかぢられ乍ら自身の重みと蔓の餘命を測らずに、わづかの野花にやどつた蜜の甘さに我を忘れて、ぶらさがつてゐる痴漢にも我々は譬へられる。怖るべくも憐れむべくもまた巧みな實情ではある。

これらは、充分と承知のお噺であるが、單なる子供だましのお話ではない。生死一大事の決意を定むべき、鐵石不磨の信を決すべきを促がされたのである。

釋尊は今の佛教々團の教祖ではないであらう、本質的には。宗祖は今の宗團の宗祖でもないであらう生命的には。然し假に我々が、佛を教祖と仰ぎ、祖師を宗祖と仰ぎ度いならば、その手續きは簡單である。宗團のすべての財産地位情實生命等を、教宗の祖に奉還すべきである。即ち井の中で、のんきに蜜などしやぶつてゐられぬからである。そして、本氣になつて、井底の大蛇ととつくむか、すきをねらつて、井の上にをどり出るか、何れかである。今こそ、佛教徒としても、宗徒として、百尺竿頭一歩を進めるとは景氣よいが、井蔓をあやしてのがれねばならぬ。絶對絶命に立ち到つたのである。

一切を献げ、すべてを懺悔し、大聖の命ぜられるまゝに、新たに發動するのみである。之が宗祖を活かし、皇國を興し、御一人の御自を甲斐あらしめ、御稜威を高揚する所以である。と私自ら信じ、こゝにかう書き記し、同時に積極的に躬行するのみである。我と默々の實行を本領となすとはいへ、かう書き記すのも多少の佛乘の緣と祈念するに過ぎぬ。

この宗門、この皇國、この世界、私をめぐるすべてをながめて、痛切に自らをみつめる。大それた、世界も日本も宗門も、それどころか自分一個半個の整理決算をつけてからではないかと思はれて來る。たしかに、まづ自決清算を經て、わづかでも、かすかでも、目に見えない歩みこそが如來所遣行如來事であり、大信の發動である。

生きてゐる御一人の尊き身命をさゝげられた、妙法の色心を任じ給ひし皇國の柱石は、晝夜に命の限り根かぎり支へ、ささへて立ちつくす。朽つるまで。あゝ。任重而道遠！

しづかに冥目し、深く、聖者の大誓願を憶念する。

日本ノ柱
日本ノ眼目
日本ノ大船

虔んで、合掌祈念し奉る、南無妙法蓮華經。